

「企画展関連講演 丹波と銃後の生活」

丹波市教育委員会 社会教育・文化財課
学芸員 玉出 隼人

<「銃後」とは>

戦争中の国において、「戦場ではない場所」、またそこで生活する「一般の国民」のことを指す（「前線」や「戦線」の対義語）。近代の日本では、「日本国内＝銃後」と捉えられることが多い。戦争が激しくなるとともに、男性が数多く従軍・出征して行ったため、予備役・後備役の男性だけでなく、女性や学生が中心となって銃後の日常生活を支えていた。

→太平洋戦争末期になると、米軍の沖縄上陸、また日本本土の都市部を中心に空襲が激化。日本国内も「戦場」となり、「銃後」であった本土も「前線」になっていった。

<戦時中の学校生活>

・尋常小学校から国民学校へ

昭和16年(1941)、国民学校令により「尋常小学校」は「国民学校」となる。丹波でも全ての尋常小学校が、国民学校となった。

→学校での教育は、「皇国ノ道」に則った「国民ノ基礎的錬成」を為すことを目的とし、国家主義の影響が見られる。

・奉安殿

教育勅語（明治天皇による近代日本の教育方針）や御真影（天皇皇后両陛下の肖像画や写真）を収めるための施設。

→昭和元年(1926)以降、丹波地域周辺の旧制中学校が競って奉安殿を建てた。旧制柏原中学校では、生徒や氷上郡内町村の寄付を受け、昭和3年(1928)5月に、洋式・鉄筋コンクリート造の奉安殿が竣工。



↑ 昭和初期の旧制柏原中学校奉安殿

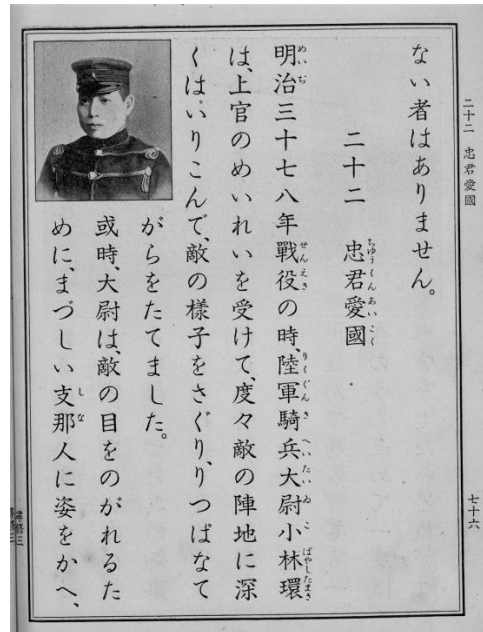
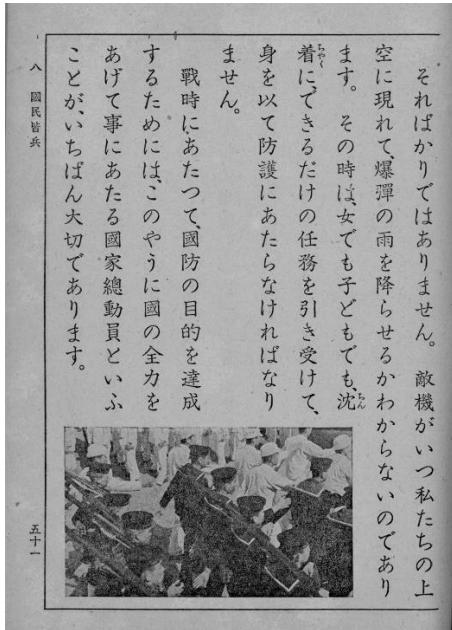


↑ 奉安殿は、現在のたんば黎明館前に位置していた。

・修身

現在の「道徳」の教科。教科書の内容は、天皇や国、仕える主君のために尽くすことの素晴らしさを説いた逸話・寓話、日清・日露戦争での日本軍や兵士の活躍や美談を掲載。

→今の道徳とは異なり、国のために尽くす子どもにするための教育であった。日清・日露戦争において犠牲になった兵士たちの話も、学校教育での「国威高揚」（国民としての士気を高める）のために利用された。



↑ 初等科修身の教科書「国民皆兵」（部分）

↑ 尋常小学校修身の教科書「忠君愛国」（部分）

・武道や軍事教練

国民学校では「体錬科」の中で武道が行われた。主に、男子は剣術、女子は薙刀術の教練が行われた。また、旧制中学校では、現役将校の指導で本格的な軍事教練が実施された。

→旧制柏原中学校では、大正 14 年(1925)、現役将校の常岡健二少佐が初代配属将校として着任し、軍事教練を開始。また、大正 15 年(1926)11 月には、4、5 年生が全員参加し、福知山の陸軍長田野演習場で、三日間の露営演習が実施された。

→昭和 10 年(1935)頃、柏原高等女学校において、体育の授業において薙刀の演武が開始。警察署主催の演武会にも参加するなど、精力的に活動した。



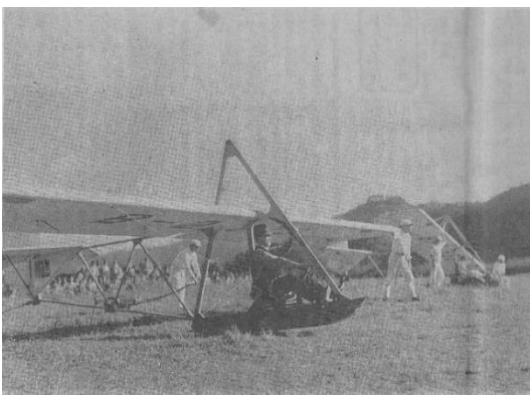
↑ 柏原高等女学校運動会での薙刀演武（昭和戦時中）

↑ 旧制柏原中学校の野外軍事教練（昭和戦時中）

・グライダー滑空訓練

戦時下の日本において、一部の旧制中学校や高等学校、大学において取り入れられた教練。組み立て式の訓練用グライダーを用いて、将来「飛行兵」となることを視野に入れた教練が行われた。

→旧制柏原中学校では、昭和 15 年(1940) の「考え方社」主催の模擬テストで英語科の成績が全国 1 位になり、翌年に副賞としてグライダーが贈呈される。氷上町新郷の赤井野原野(白山と弘浪山の間)を開拓して、滑走訓練場を建設。教練科の授業で滑空訓練を開始。その後、中学校の生徒の家族および学校職員が自作した同型グライダーが寄贈されて 3 機に。赤井野原野に格納庫も設置された。選ばれた 25 名の生徒を対象に「滑空班」として本格的に飛行訓練を開始。「甲種飛行予科練習生」(海軍飛行兵養成制度)に志願する生徒が複数名現れた。のちに青年学校(勤労する若者の社会教育学校)の生徒も参加。



↑ 赤井野原野での滑空訓練の様子(昭和 16 年頃)

↑ 旧制柏原中学校滑空班の集合写真(昭和 16 年頃)

・「生産増強」のための労働

戦争が長期化したことで日本の食料や物資は不足。戦争末期に近づくにつれて、学校においても授業の時間を割いて、「生産増強」のために畑仕事や薪集めなどの労働が行われた。

また、旧制中学校、高等女学校から軍需工場へ勤労働員で働きに出なければならなかった。

→国民学校では、校庭の広範囲をサツマイモなど畑にして、授業をせずに農業が行われた。

また、丹波では近隣の山へ通い、薪に使う木を集めに行った。

→旧制柏原中学校では、昭和 14 年(1939)、山に炭焼き窯を作り、町有林から払い下げを受けた炭材で莫大な量の炭を生産。全国でも例のない生産量であったため、文部省や農林省の役人が視察に訪れた。

→戦争末期、3・4 学年は軍需工場への勤労働員で不在であったため、1・2 学年の生徒が物資増産の役割を担った。精力的に実施され、優秀であるとして県からも表彰を受けた。

→旧制柏原中学校では、昭和 19 年(1944) 7 月から 4・5 年生が鐘淵紡績(後のカネボウ)の西宮工場へ、3 年生が大日電線(現三菱電線工業)の尼崎工場へ学徒勤労働員された。

→柏原高等女学校では、昭和 18 年(1943) 12 月に第 1 回女子挺身隊として 24 名が川崎航空伊丹工場で働いた。昭和 19 年(1944) 6 月に 4 年生全 112 名が「学徒勤労働員報国隊」とし

て、中山寺の宿舎で寝泊まりしながら尼崎甲陽製作所へ、3年生全 118 名は東洋電機成松工場へ動員された。



↑ 柏原高等女学校の薪増産作業（昭和戦時中）



↑ 旧制柏原中学校の製炭作業（昭和戦時中）

＜米軍機の飛来と都市部からの疎開＞

・米軍の本土空襲と民間防空

昭和 17 年(1942) 4 月 18 日、米空母ホーネットから発艦した爆撃機が東京・川崎・横須賀・名古屋・神戸などの日本の都市部を爆撃。(初の日本本土空襲攻撃「ドーリットル空襲」)これ以降、各地で断続的に空襲があり、また、米軍がマリアナ諸島を占領し、航空基地建設以降は、日本のほぼ全域が空襲の射程範囲となったため、さらに本土空襲が激化。

→幸い丹波では直接的な空襲被害はなかった。一方で、阪神間を襲った米軍爆撃機が、中国本土へ渡る際に、低空飛行して通過する事例が絶えなかった。また、その度に「防空壕」(米軍機来襲の際に、爆撃や機銃掃射から逃げるために作られた施設)へ逃げ込まなければならず、不安な日々が続いた。

→学校においては、校庭に防空壕が築かれており、生徒たちは防空壕を作る作業も行ったという。また、氷上町の犬岡山では、現在でも民間で築かれた防空壕跡が残っており、内部は、5.5mの通路を抜けると、奥は横幅 9.1m、奥行き 1.2m、天井高 1.8mの空間となっている。

→丹波では、昭和 16 年(1941) 8 月 15 日、柏原・新井・船城・黒井・国領の連合の「防空監視哨」(米軍機来襲の早期発見のための監視施設)が、柏原町柏原の小南山の山頂に設置された。当時、青年学校生徒が交代で 24 時間見張りを務めたという。現在も小南山の山頂には、敵機の攻撃から身を守るために掘られた塹壕の跡が残る。同様に、氷上町の甲賀山にも監視哨が設置された。



↑ 犬岡山の麓に残る防空壕跡



↑ 小南山山頂からは篠山方面を広く見渡せる。

・国内の疎開実施地域

昭和 18 年(1943)12 月「都市疎開実施要項」が閣議決定され、東京都区部、横浜、名古屋、大阪、神戸、尼崎などが疎開地域となる。また、昭和 19 年(1944)6 月の閣議で「学童疎開促進要項」が発表された。同年 7 月の緊急閣議では、沖縄も疎開地域となる。

→国によって疎開する場所が割り当てられたわけではなく、各々で疎開の受け入れ先を探さなければならなかった。丹波に疎開した人々も、親戚や知り合いなどの伝手を頼って疎開してきた。

・丹波への学童疎開

戦時下の丹波は、都市部と比べて爆撃による空襲を受けることはなかった。そのため、主に神戸・尼崎などから疎開を受け入れる事例が多かった。

→旧制柏原中学校では、尼崎杭瀬国民学校（現杭瀬小学校）の要請を受け、昭和 19 年(1944)6 月 24 日から翌年 3 月 2 日にかけて同校初等科 6 年の女子生徒 38 名と教員 2 名の疎開を受け入れ、本館 2 階を提供した。

→昭和 19 年(1944)9 月には、同じく尼崎市浜国民学校（現浜小学校）の 3 年生以上の児童が、現市島町内の竹田・吉見・前山・美和の 4 村に分かれて疎開。竹田村では、石像寺が疎開の受け入れ先になった。他にも、氷上町御油の円通寺や山南町谷川の常勝寺など、寺院が疎開の受け入れ先となっている事例は多く、本堂や庫裏を借りて集団生活を送った。

→神戸市東灘区の甲南学園甲南初等学校では、昭和 20 年(1945)4 月から 3~6 年生の生徒約 100 名と引率の教員 10 人弱が、山南町太田の慧日寺へ疎開。学校に丹波へ縁がある教員の伝手で受け入れが決まったという。

→氷上町市辺の明光寺は、沖縄から疎開児童を受け入れていた。当時の住職が、修行の際に縁のあった沖縄のとある地域から疎開を受け入れたという。



↑ 慧日寺疎開当時の甲南初等学校児童（昭和 20 年頃）

↑ 沖縄から疎開を受け入れた明光寺

・丹波への工場疎開

疎開の対象となったのは人間だけではなく。全国の工場（軍需工場）も次々と内陸部の地域へ疎開を開始。

→旧制柏原中学校では、昭和 20 年(1945)2 月、軍需工場東洋ベアリングが学校の講堂内に

工場疎開してきて、柏原工場として開場。しかし、同月、家事裁縫室と松柏図書館が焼失。東洋ベアリングから出た火が原因とされる。

→大正8年(1919)に発足した「陸軍科学研究所」が現・神奈川県川崎市に移設され、昭和14年(1939)に「第九陸軍技術研究所(通称・登戸研究所)」が成立。登戸研究所では、諜報機材、化学兵器、偽札、風船爆弾などの「秘密戦」に特化した兵器が生み出され、極秘とされた。昭和20年(1945)に川崎の工場を各地へ疎開しており、その一つが山南町の小川国民学校であり、「小川分室」と呼ばれた。主にゲリラ戦のための焼夷材など軍事行動に伴う資材を作っていたと言われ、小川分室の工場機能は、久下・小川国民学校の講堂に移された。久下国民学校については、実際に稼動することはなく終戦。

また、和田国民学校では、同校高等科の男子生徒が小川分室で、終戦まで携帯爆弾の容器の製造を行っていたと言われる。

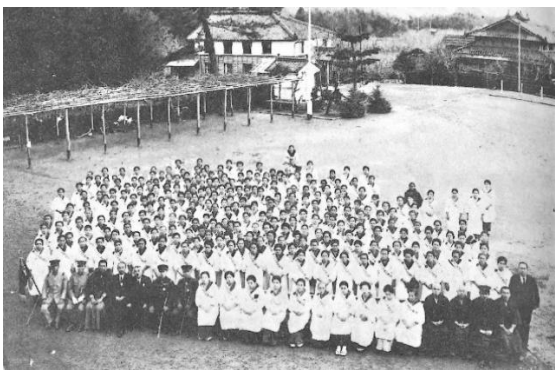
<戦時体制下の暮らし>

・銃後を支える婦人会

男性は多くが戦場へ行かなければならないため、銃後の暮らしを支えるのは、主に銃後に残された女性たちの役目になっていった。

→大政翼賛会の主導で、明治以降に設立された「愛国婦人会」「大日本連合婦人会」「大日本国防婦人会」が合併され、昭和17年(1942)2月「大日本婦人会」が設立。銃後の支援がより強化される体制となり、各村内でも細かく組織が分けられていた。

→戦時下の婦人会の活動は、出征兵士の見送り、武運長久祈願のための氏神参拝、出征兵士へ贈る慰問袋や千人針の作製、出征兵士の家族に対する慰問会の開催、空襲被害を想定した防空訓練、戦死した「無言の兵士」の出迎えなど、多岐に渡った。



↑遠阪村婦人会集合写真(昭和12年頃)



↑柏原駅で出征する兵士を見送る様子(昭和12年頃)

・物資の統制

戦時下において、軍の必要物資を確保するため、様々な物資が国によって統制された。昭和13年(1938)公布の「国家総動員法」に伴い、米・味噌・醤油・塩・マッチ・木炭などの10品目が配給制となった。また、昭和16年(1941)3月、生活必需物資統制令という勅令が出て以降、様々な物品が配給の対象となった。

→地域ごとに設定された配給所（商店または町内会や隣組の拠点）において、各家庭の人数に応じた一定量を受け取ったが、当時の1人当たりの平均消費量の4分の3ほどであり、決して十分ではなかった。柏原町柏原内の商店では、塩・砂糖・油・バター・履物の配給所となっていた。

・物資の供出

物資の統制に伴い、物資の自由な売買や保有までも制限がかけられることになった。昭和17年(1942)2月公布の「食糧管理法」によって、米・麦・芋類などの主要食糧を国が管理することとなり、配給制とともに、戦時体制の強化が国民の食生活に影響を与えた。自作する農家においても、最低限家庭で消費する量を残して、強制的に大量の米が供出された。

また、昭和18年(1943)8月に公布された「金属類回収令」によって、身の周りの様々な金属類が、兵器の生産のために供出された。日本全国の寺院の梵鐘^{ぼんしょう}が、一斉に供出され集められたことで知られる。

→氷上町横田の青蓮寺において、戦時中に梵鐘が供出されたが、戦後に岡山県内の寺院で、溶かされることなく残っているのが発見された。しかし、鐘には、銅やスズなど成分の含有率を調べた穴が空けられていたため、再び梵鐘として用いることは断念し、新たに鑄造し直したという。また、同寺院の半鐘は、戦時中は火の見櫓に上げられていた。戦時下においては、防空対策に欠かせなかったため、櫓にあった半鐘の供出は免れたと考えられる。

→鐘ヶ坂トンネルや阪鶴鉄道（JR 福知山線）の開通に尽力したことで知られる田艇吉翁像は、もともと柏原八幡宮のある入船山の麓に建てられた。昭和12年(1937)6月に多くの参列者のもとで除幕式が行われたほどであったが、昭和18年(1943)7月に金属供出された。昭和41年(1966)に再建され、現在はJR柏原駅前に設置されている。

→その他にも、山南町和田小学校「野垣靖翁之像」、春日町黒井の兵主神社「青銅一の鳥居」、柏原八幡宮の「青銅神馬」、市島町中竹田の加茂神社「青銅神馬」などの供出事例あり。



↑ 現存する宝暦12年(1762)鑄造の青蓮寺半鐘



↑ JR 柏原駅前の田艇吉翁像（2代目）



↑現在の兵主神社の石造一の鳥居



↑加茂神社に残る青銅神馬台座

・軍への献納金

明治27年(1894)の日清戦争以降、陸軍または海軍へ直接軍資献納金や贈与品を募るようになり、大きな戦争が勃発するたびに全国各地で軍へ献金を行う運動が起きた。

→昭和6年(1931)の満州事変勃発時に、鉄兜や献金を献納した群馬県の団体「国民国防同盟会」が主体となり、兵器の製造を目的とした献金が進められた。中でも、軍用飛行機の製造のための献金は強制力を増していき、市町村ごとに一定額を集めたという。献納された機体には、その地域の名前を冠した名前がつけられた。なお、陸軍機は「愛国号」、海軍機は「報国号」と呼ばれた。丹波での献金による機体は、「愛国〇〇〇号(氷上郡民)」と書かれた陸軍機の二式単座戦闘機が3機あった。



↑「愛国 3532 号 氷上郡民」と書かれた陸軍二式単戦

<まとめ>

丹波における銃後の生活は、物資の不足や男性の出征に伴う人手の不足によって、戦時中も苦しい生活を強いられ、婦人会が中心となって戦時下の生活を支えた。

都市部のように、空襲による直接的な被害はなかったが、大陸側へ通り抜ける米軍機が通過することもあった。また、神戸や尼崎などの都市部から人や工場の疎開を受け入れる事例が数多くあり、集団での受け入れは、学校や寺院が多かった。

学校においては、国のために尽くす子どもを育てる内容で教育が行われた。戦争末期に近づくにつれて、授業の時間を割いて農業や工場での勤労をしなければならなかった。また、将来兵士になるため、あるいは本土決戦に備えるため、軍事教練や武術の授業が行われた。